2007年(平成19年)8月28日(火曜日)　夕刊　読売新聞

生活指導者としての姿も

カミ・ホトケはどこへ ⑤

中牧弘允

カラチからカイロに向かう機中、紅海の上空で目が覚めた。眼下には朝日に輝く荒涼たる山肌が連なっていた。はじめて見たアラビア半島は、緑豊かな日本列島とくらべると別世界だった。鎮守の森に宿る日本のカミとは異質のカミがいてもおかしくはない。

メッカに生まれたムハンマド(マホメット)は40歳の頃、アッラーの啓示を受け、誠実にその教えをひろめ、いまでは全世界に13億もの信者を有する宗教の開祖となった。砂漠の宗教といわれるイスラームだが、中東のオアシス都市だけでなく、西は西アフリカから東はインドネシアまで、北は中央ユーラシアから南は東アフリカ沿岸部まで広範囲に伝播した。

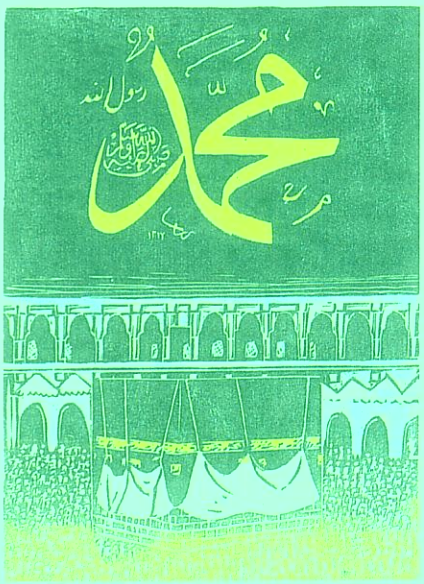
そしていまやグローバル化のなかでキリスト教に次ぐいきおいで教勢を伸ばしている。そのためもあって各地で摩擦や葛藤がおき、紛争や戦争も後をたたない。その原因は宗教的なものから経済的なものまで複雑きわまりない。ここではムハンマドに焦点を当て、いくつかの問題点を浮き彫りにするにすぎない。

ムハンマドは啓示をさずかるまで、さほど傑出した人物ではなかった。幼くして孤児となり、読み書きはできず、15歳も年長の女性から求愛され、妻の経営する隊商交易に従事していたという。それが洞窟での啓示をきっかけに預言者・伝道者となり、宗教実践からもめ事の調停にいたるまで、信者の生活全般に関与しはじめたのである。

ムハンマドはアッラーに突き動かされ、能力や出自という一点にはなく、誠実にその使いて、曇なくとした。そのせ命を果たし純で、純粋であいか教えのような思弁を る。三位内禁止などのタブ弄さず、一

ムハンマド

ーは数えはどしかない。
にもかわらず、そのこと が逆に、非容というイメー ジを増幅さ念を定着させ という固定 た。開教当 性を固守・興しようとする ときき、きて軋轢が生じ、 対立が激化る。 ムハンマド自身も敵意にさらされ、迫害を受け、逃避を余儀なくされた。移住先のメディナではウンマとよばれる信仰共同体の維持・発展に尽力した。だが、部族主義をこえ、弱者を救済し、社会的公正をもとめる運動は戦闘に巻き込まれた。ムハンマドは軍事指揮官としてメッカ軍を迎え撃ち、一連の戦いに勝利をおさめた。余勢を駆ってメッカにも進軍し、カアバ神殿を取り囲む多くの偶像を次々と杖で打ち壊したと伝えられている。



版画・田主誠

教祖や宗祖で戦争に従事した人物はメシアニズム(救世主信仰)をのぞき稀有である。他方、コーランには「すべての宗教がただ一つアッラーの宗教となるその時まで、あくまでも敵と戦い続けよ」(井筒俊彦訳)とある。

たしかにタリバンが巨大石仏を破壊し、イスラーム過激派がテロに走るとき、美術的価値や世俗的倫理が通用しない一因は、厄介なことにアッラーの啓示やムハンマド自身の行動にある。

だがもう一方で、人びとの日々の暮らしが天啓のコーランだけでなく、ハディース(ムハンマドの言行録)に依拠していることにも目を向ける必要がある。そこでは預言者や軍事指揮官というだけでなく、生活者としての、あるいは生活指導者としてのムハンマドの姿がくわしく描かれている。信仰共同体が永続し発展する秘密は、戦時下の政治や軍事に目を奪われがちではあるが、実は日常生活にあるといっても過言ではない。ハディースこそ、もうすこし読まれるべきである。たとえ異色の世界であっても。(国立民族学博物館教授・宗教人類学)